

# 西側はなぜグローバルな宣伝戦に負けているのか

パンカジ・ミシュラ

ブルームバーグ 2023年2月14日

自国の帝国主義的な過去を直視しないから、プーチンやその他のデマゴーグに付け入られるのだ。

[Why US and Allies Are Losing the Global Propaganda War - Bloomberg](#)

先週末、アメリカからの空売り報告を受けてインドの企業集団「アダニ・グループ」の株価が急落したとき、2300万人のフォロワーを持つ人気の元クリケット選手が「白人はインドの進歩を許せないのだ」とつぶやいた。アダニ・グループの広報担当は、1919年に400人近い非武装の市民がイギリス軍に虐殺された悪名高い事件を引き合いに出した。

そのわずか数日前には、インドのヒンドゥー教民族主義政府が、2002年の反イスラム暴動にナレンドラ・モディ首相が関与したとされる2部構成のドキュメンタリーを禁止し、制作したBBCを「植民地的な考え方を持ち続けている」と非難していた。この非難はすぐにインド中に響き渡った。

(インドにたいする)欧米の批判にたいし、この時とばかり、反植民地主義の古い旗印を掲げているのは、インドのエリートだけではない。昨年、ロシアのプーチン大統領は、ウクライナ4州の違法な併合を発表した際、インド、中国、その他アジアやアフリカにおける西洋の歴史的略奪を徹底的に非難し、ロシアを「人種差別的」で「新植民地主義的な」な西洋に対する反植民地のグローバル同盟の指導者として描きだした。

間違っただけではない。欧米諸国に対する道徳的非難は、W.E.B. デュボワが「暗黒国家」と呼んだ諸国が、民族自決のために戦った20世紀半ば以来、これほど広まったことはない。そして、自分勝手なデマゴーグに増幅されたとはいえ、そ

れは再び大衆の意識となり、世界中の地政学的な関係を緊張させるようになっている。

欧米の政治家やメディア関係者は、この問題の大きさによろやく気づき始めたばかりだ。例えば、ロシアにたいする軍事・経済戦争では、白人が多数を占める欧米諸国が、ますます孤立しているように見える。最近の世論調査では、ウクライナでの戦争について、ロシアよりも NATO やアメリカを非難するインド人が多かった。南半球で最も称賛される指導者の一人であるブラジルのルラ大統領は、「罪を犯しているのはプーチンだけではない。米国と EU も有罪だ」と考えている。

インドネシアでは、ウクライナ戦争が始まって以来、プーチンに対する民衆の支持が広がっている。プーチンの反植民地主義的なレトリックは、アフリカでも耳にすることが多くなっている。

ウクライナ領土を食い荒らしながら、筋金入りの反植民地主義者のポーズをとるプーチンの恥知らずな偽善を指摘しても、これらの国々にはあまり説得力を持たないだろう。西欧や米国による搾取と悲惨な介入の記憶はあまりにも強くいまだに残っているのだ。

さらに重要なことを彼らはみている。それはアジアとアフリカのかつての支配者たちが、過去におこなった暴力、収奪、略奪の(問題に)に立ち向かうことをいまだ拒んでいることである。

実際、多くの人々が白人至上主義の政治と文化を再評価し、それを主流にしようと躍起になっている。大統領候補と目されるフロリダ州知事のロン・デサンティスは、人種差別がもたらす壊滅的な影響に関する学術的研究を抑圧する共和党の取り組みの先頭に立っている。ボリス・ジョンソン元英首相は、英国の植民地主義者はアフリカを去るべきでなかったと主張しているが、仲間のなかではそれほど孤立していない。彼の新著はタイムズ紙への寄稿者から広く賞賛されているが、英国の植民地主義は「道徳的」だったと主張しようとしている。

このような修正主義は一種のパターン化している。つまり知性や政治的主張の強い少数派に向かうと、欧米では多くのリベラルで中道的な政治家やジャーナリストでさえ、「社会的不公正への高い意識」とか「社会的に不適切な人びとの追放」について道徳的なパニックを煽るようになるのである。

世界的なプロパガンダ戦争に負けるには、これほど簡単な方法はない。

いつの時代も、人々は互いにせめぎ合う歴史観のなかで自己認識している。何十年もの間、西洋の白人たちは、政治的、知的、技術的な飛躍的進歩によって近代世界を作ったと主張してきた。西洋が相対的に衰退した今日、より多くの人々は、同じように説得力のある別の物語、つまり、白人が世界の多くの人々を服従させ、見下していたという物語の中に自分たちを見出すようになっているのだ。

欧米の指導者たちは、このような深く広いコンセンサスを鎮めようと思わないほうがよい。人種差別や帝国主義に関する学術的な証拠を抑圧したり、社会的不公正について高い意識を表明したりしても、このコンセンサスは個人や集団の屈辱という痛ましい経験の上に成り立っているからだ。彼らはむしろ、政治的・知的文化を、平等の理想と、多元主義にたつ人口学的・文化的事実に方向づける方がよいだろう。

米国はかつて、物語の世界的な衝突のなかで道徳的優位を失わないことの重要性を認識していた。1963年、アラバマ州バーミングラムで地元警察が公民権運動の参加者に残忍な暴行を加える光景が国際的な反発を招いたとき、ケネディ大統領は介入を余儀なくされた。キング牧師が指摘したように、ケネディが行動したのは、当時、「アジアとアフリカの人々の心と知性を守る」ために戦っていたからであった。

冷戦時代、民主党の指導者たちは、南部でジム・クロウ支持者と決別し、アフリカ系アメリカ人の公民権拡大を加速させた。それは、文明的で規則に基づいた自由主義秩序を推進しようとする国は、まず自身でそれを体現しなければならないことを知っていたからだ。

今日、西側諸国はプーチンの侵略を非難する一方で、自国の植民地主義の過去に由来する人種的、文明的傲慢さを、育むとまでは言わないまでも、容認している。ご都合主義的な世界の反植民地主義者たちは、このプロパガンダ戦争に戦わずして勝利するかもしれない。(了)